

実践的自治会町内会論

震災復興からの住民が主体となったまちづくり

宮城県石巻市

一般社団法人石巻じちれん

事務局長

田上琢磨



終の棲み処とこころの故郷づくり

私たちは、東日本大震災の最大被災地である石巻市にある、市内最大の大規模集団移転地のぞみ野地区（新蛇田地区）で地域支援を行っています。前身となる、「石巻市仮設住宅自治連合推進会」は、『孤独死をなくそう』をスローガンに、仮設住宅自治会の連携組織として2011年に設立しました。2015年に災害公営住宅の建設や移転先の整備が進み、仮設住宅からの移転が最盛期を迎える頃、終の棲み処となる移転先でもコミュニティ支援が必要と考え、新蛇田地区に拠点を移し、現在の屋号に変わりました。活動拠点を移してからは、自治会形成や連携支援、住民の合意形成のサポート、地域の集い場づくりの企画や運営、生活相

談などを行っています。

様々な地域性が混ざり合うこと

石巻市のぞみ野地区は、震災以前は田圃と畑が広がる土地で、震災後に沿岸部から移り住んだ人々が現在1408世帯、3179人が暮らしています。そのうち533戸は災害公営住宅です。自治会の形成に際して、「災害公営住宅のみで自治会を作ると高齢化が進み、自治会が立ち行かなくなる」という阪神淡路大震災の教訓をもとに、災害公営住宅の住民と戸建て住宅の住民が共に自治会を作るという方針のもと、4つの自治会が設立されました。しかし、災害公営住宅と戸建て住宅では暮らし方が異なることから「戸建ての人たちとは一緒にはなれない」という意見が出たことで、3つの災害公営住宅があ

る区画は独自で自治会の形成を目指しました。しかし、役員の担い手不足から設立を断念し、自治会空白地となっていました。新たな街でいつまでも行政区・自治会を空白地におくわけにもいかず、数年後には隣接する自治会と再度話し合いの場をつくり、合流するに至り、現在は4つの自治会区域で地域を構成しています。

この街は様々な地域から人が集まったため、ひとりひとりが以前の暮らし方を元にした考え方ややり方を持ち、お祭りや防災訓練などの行事や、地域の決め事を行う際に「自分の住んでいた地域ではこうだった」という意見の押し付けあいや、衝突もしばしばありました。しかし、何事もゼロからつくるからこそ、これまでの経験を持ち寄り、ぶつかることが必要なプロセスだったのかもしれない。

1つの自治会でできないことは 自治会同士の協働で

地区内には災害公営住宅の付帯設備として整備された集会所が4カ所あり、それとは別に各集会所の2倍ほどの大きさを持つ集会所の計5つの集会所があります。4つの小集会所では、入居当初こそ個別にサロンなどが行われていましたが、入居から10年もたつと多くの集会所は役員会の時くらいしか利用されなくなってきたところもあります。

一方で、大きな集会所では選挙の投票所や自治体の健康診断などの公的な催しが行われる他、入居当初からいまに至るまで、地域住民が活動する拠点となっています。

入居当初、集会所を地域全体で共用するために隣接する災害公営住宅の代表者で「集会所運営委員会」を組織し運営ルールづくりを行い、町内会が設立された後には町内会代表者を委員に加えるとともに、「のぞみ野町内会協議会」と名称を変更し、運営会議として定例的に会議を行うことで地域内の情報共有や課題解決に向けた検討を行っています。定例の会議には、議題によって、また地域向けに情報提供などがある場合には、地域の代表者のほかに外部のNPO等や社協や行政関係者が参加し、地域との対話を行う場

にもなっています。

そうした情報共有や協議のほかにも、年に一度の地域の盆踊りや、地区の防災訓練、地域の一斉清掃の企画や交通安全運動の実施など、地域全体に関わる行事運営について話し合うなど、協議会があることで町内会同士の協働、相互扶助の基盤となっています。

地域の行事や取り組みは、協議会で実施する以前はそれぞれの町内会がバラバラに行っていたり、やる必要性は感じているけれどやれていないことが多くありました。それを一本化することで、単一の町内会でやるよりも規模を大きくし、担い手や資源の共有による負担の軽減につながりました。実施までの調整や話し合いを丁寧に行う必要もありますが、協働による相乗効果や負担軽減につながった事例を経験として積み上げていくことで、地域の連帯感の形成につながっています。単一地域でできないことは地域の横連携で、地域連携でも解決できないことは外の力もかかります。地域やセクターを跨いだ協働を行うためには、情報共有と相互理解しかないのだと思います。

また、協働の成果として、子ども会の設立があげられます。のぞみ野では自治会の設立後に、子ども会や育成会の設立が議論されましたが、創生期には他の活動の立ち上げに注力していたことや、自治会設立時のメンバー



町内会ができて初めての夏祭り



町内会合同で行う交通安全



市や公社、NPOも参加した団地懇談会

に子育ての当事者はごくわずかしかなかったこともあり、子ども会設立には足踏みが続けていました。一方、保護者からは、住み慣れた地域でないからこそ、子ども同士がつかれる場が欲しいという声が強くなっていました。そんな中、それぞれで立ち上げが難しければ4つの町内会で一つの子ども会を立ち上げて、町内会はそこを支援するという形で組織形成する案がでます。2019年の夏の盆踊り大会で子どもや保護者に周知や協力者の募集を行い、その後設立に至りました。

現代の地域社会においては、共稼ぎの世帯が増えたり、塾や習い事に通うことが当たり前になってきたことで、子ども会に入らない子どもも増え、全国的に子ども会を解散する



子ども会クリスマス会

地域も増えてきています。しかし、のぞみ野地区にとつて子ども会は、コロナ禍を乗り越える大きな原動力になりました。

コロナ禍での地域活動・子どもたちに故郷を

2020年、新型コロナウイルスにより地域行事や町内会活動が中止されました。毎年恒例になりつつあった夏の盆踊りの中止が決まった後、子ども会の代表と立ち話をするなかで、「高齢者が出てくることに不安があるのは仕方ないが、子どもたちも学校や家庭でストレスをためているという声をきいている。保護者の意見も聞いたうえで子どもたち



コロナで中止になった盆踊りの代替で行ったあきまつりの準備

だけでも集まれるような場を作れないか」という話が出ました。代表は子ども会の保護者有志に声をかけ、「自分の子どもを安心して送り出すにはどんな感染対策を施せばよいか」をもとに話し合いを行い、手持ち花火大会を実施することになりました。開催した花火大会では、子どもたちが久しぶりに目いっぱい遊べる環境ができ、地域の方からも「久しぶりに外から子どもの声が聞こえて、嬉しくて窓からみていたよ」との声が聞こえてきたほか、保護者からも「やっと夏休みらしい思い出ができたと思う」と話していました。この花火大会は地域のつながりが強まる場面となりました。子ども会づくりで奔走した役員さんと、「あの時に少し無理してでも子ども



コロナで実施した花火大会

も会をつくっていいよだったね」と話したことを今でもよく覚えています。

地域の実情を正しく把握する

コロナに対する位置づけが変わり2年が経過しました。様々な地域活動を再開するとともに、これから興していく途中だった地域の取り組みを新たに積み上げていかなければなりません。

震災後の移転第一号に住民が移り住んでから、今年で10年が経ちます。今年初めて地域の実情を正確に知り街づくりに役立てようと、町内会協議会と協力して地区住民アンケートを実施しました。

その結果をいくつかピックアップすると、

「普段の生活のなかで、孤独感、孤立感を感じることはありますか」という設問に対し、戸建て住宅では11%、災害公営住宅では34%が「感じる」と回答がありました。また、「ご近所の方と関係構築はされていますか?」という設問では、7%の方が「近所付き合いはなく、顔もわからない」と答えています。

長い方で10年、遅くに移転してきた方はまだ5年程度しかここに暮らしていないため、地域の繋がりも、震災前からの既存の地域と比べればまだまだ弱いのだと思います。また、災害公営住宅をみれば、市全体の平均よりも2割ほど高齢化率は高く、今後さらに悪化が予想されます。アンケートの結果は地域の実情をよく反映していたのではないのでしょうか。

アンケートではそのほかに、「地域活動への満足度」や自由記述とした地域へのご意見なども取りましたが、結果を協議会に共有した際に、「なかなか手厳しいなあ」と集計結果を眺めていました。しかし、明るい要素もあり、「地域活動への主体的な関わり方」の設問では、主体的に活動していきたいという方は少なかったものの、「活動の中心になることは難しいがサポートはしたいと考えている」と答えた方が約25%いることや、「役割割り明確であればやってもいい」という回答も多く、地域の方にどう活動に関わってもらったらい

いかを考える良いヒントにもなりました。

目指したい地域の姿

移り住んで10年、来年で震災から15年。切り取り方や報道のされ方などで、節目を感じることはありますが、地域のコミュニティは人の暮らしが連続する日々のなかにしかありません。私たちはこれまでと同じようにのぞみ野で住民の連携支援を行いながら、人のつながりを育むことで、終の棲み処としてここを選んでよかったなと思える環境になればと思います。いつか子どもたちが大きくなった時には、胸を張ってここが育った街だと言える。そんな街づくりをつづけていきます。



新市街地地図づくりWS